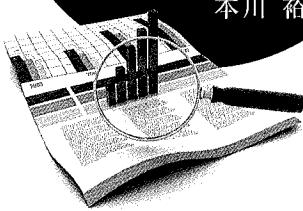


データが語る “いま”

本川 裕



第14回

ミドル層で 増えるうつ

うつ病や躁うつ病にかかる人が増えているといわれる。今回は、厚生労働省発表による「患者調査」の結果から、「気分障害」(うつ病、躁うつ病がほとんど)の総患者数の推移を紹介した。自覚症状があっても、医療機関にかかっていない人は数字に出ていない。

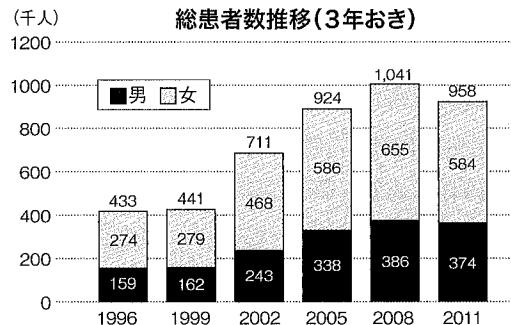
1996年には43.3万人であった総患者数(調査日には通院しなかったが前後に通院している者を含む患者数)は1999年には44.1万人とほぼ横ばいであったが、その後、2008年には104.1万人と9年間で2.4倍に増加したのが目立つ。

しかし、2011年には2008年から8万3千人減少して、95万8千人と100万人を切った。2011年調査では東日本大震災の影響で宮城県の一部と福島県の数字が含まれていないがこの未調査地域の2008年推定値2.1万人を考慮に入れても減少傾向は変わらない。

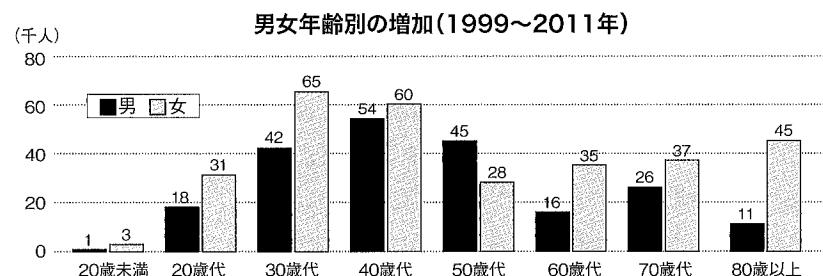
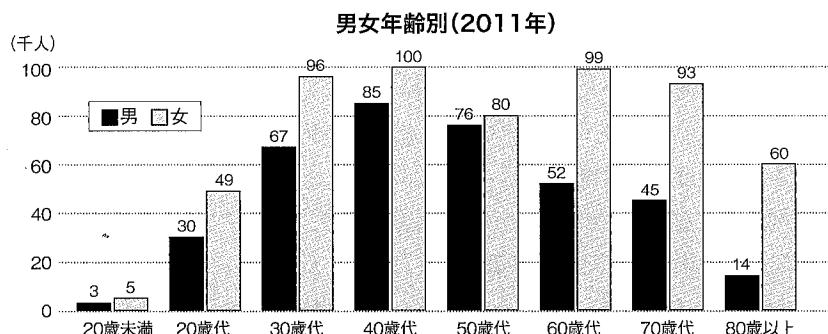
うつ病・躁うつ病患者がどのくらいいるかによってストレス社会の程度が測れるとすれば、21世紀に入り別次元のレベルに深化したのではないかと推測されたストレス社会も、ここへ来て一段落したといえよう。

男女別では、うつ病・躁うつ病の場合は男性より女性のほうが6割も多い

図表 うつ病・躁うつ病の総患者数



調査時点(各年10月)における「気分障害(躁うつ病を含む)」(ICD-10:F30-F39)の総患者数であり、うつ病および躁うつ病(双極性障害)の患者が中心。総患者数とは調査日に医療施設を行っていないが継続的に医療を受けている者を含めた患者数(総患者数=入院患者数+初診外来患者数×平均診療間隔×調整係数(6/7))。2011年調査については東日本大震災の影響により宮城県(2008年1.6万人)のうちの石巻医療圏、気仙沼医療圏および福島県(2008年1.9万人)を除いた数値である。



(資料) 厚生労働省「患者調査」

のが目立っている。いずれの年齢層でも女性が男性を上回っている。

年齢別には、男女ともに40歳代が最も多いため、女性は、30歳代も40歳代と変わらず多い。さらに、女性の高齢層に患者が多い点が男性と大きく異なっている。

最後に、1999年から2011年にかけての男女・年齢別の増加数をみると、男性は40歳代、女性は30歳代でき

わだって目につく。30~40歳代で“うつ”が大きく増加しているのは、企業の合理化・効率化・非正規雇用化が進むなかで、現場におけるしわ寄せがこうした年齢層に重くのしかかっているうえに、子育て期にあるこの年齢層では、社会関係の希薄化や所得の伸び悩みといった家庭と仕事の両面でますます生活上の困難な課題に直面しているからではないだろうか。



ほんかわ・ゆたか

東京大学農学部農業経済学科出身。(財)国民経済研究協会常務理事を経て、アルファ社会科学(株)主席研究員。現在、幅広い分野の統計データをグラフ化して公開する「社会実情データ図録」サイトを主宰しながら、地域調査等に従事。著書に『統計データはおもしろい!』(技術評論社)、『統計データが語る日本人の大きな誤解』(日経プレミアシリーズ)など。